

海軍歴史

卷一至卷三

壹

国立保健医療科学院蔵書



10012143

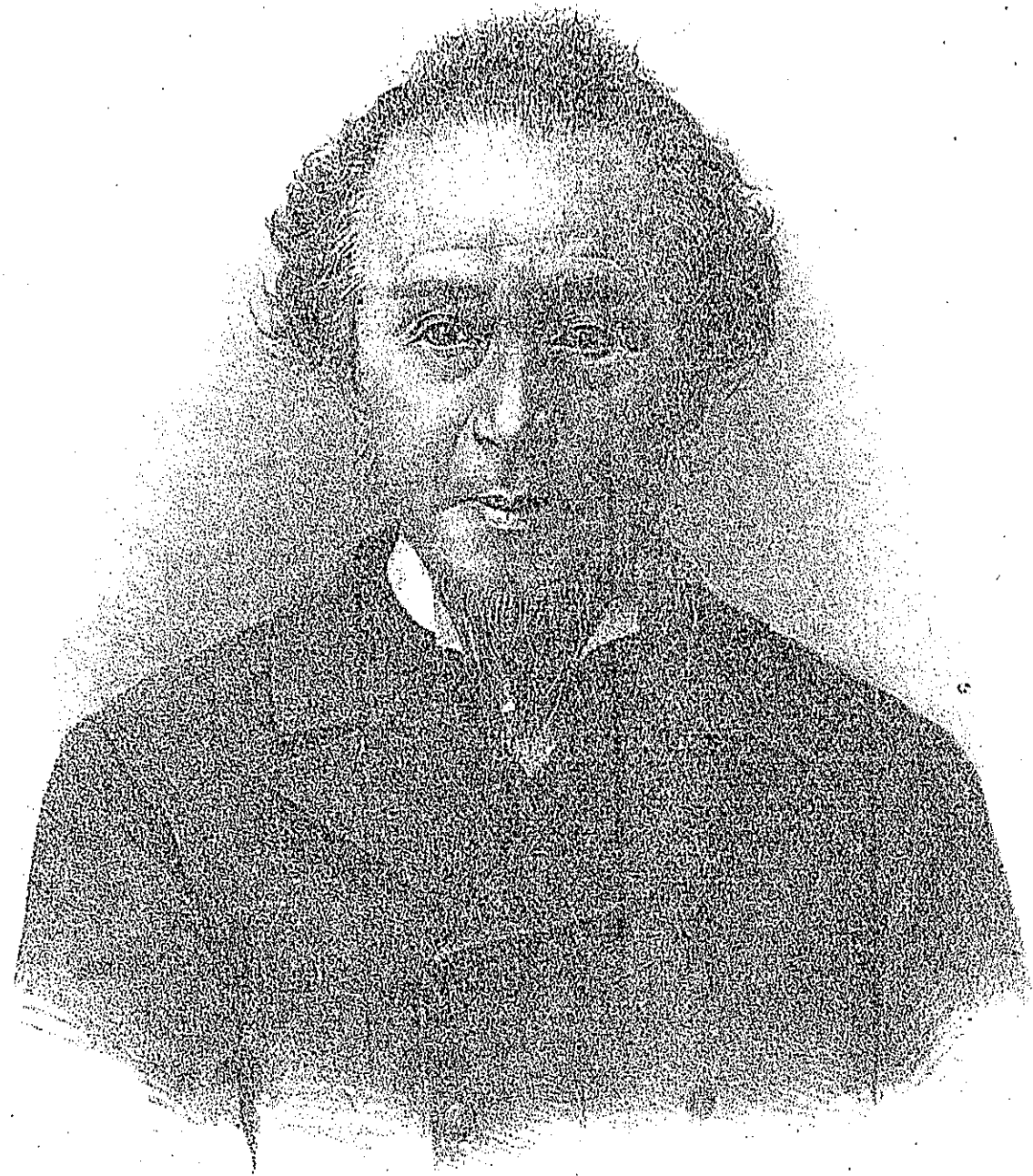
DI
I
II

DI
1

昭和24年11月7日
高宮篤氏
寄贈
公衆衛生院

濟軍歴史

DI
I
II



伯爵安芳

DI
/
//



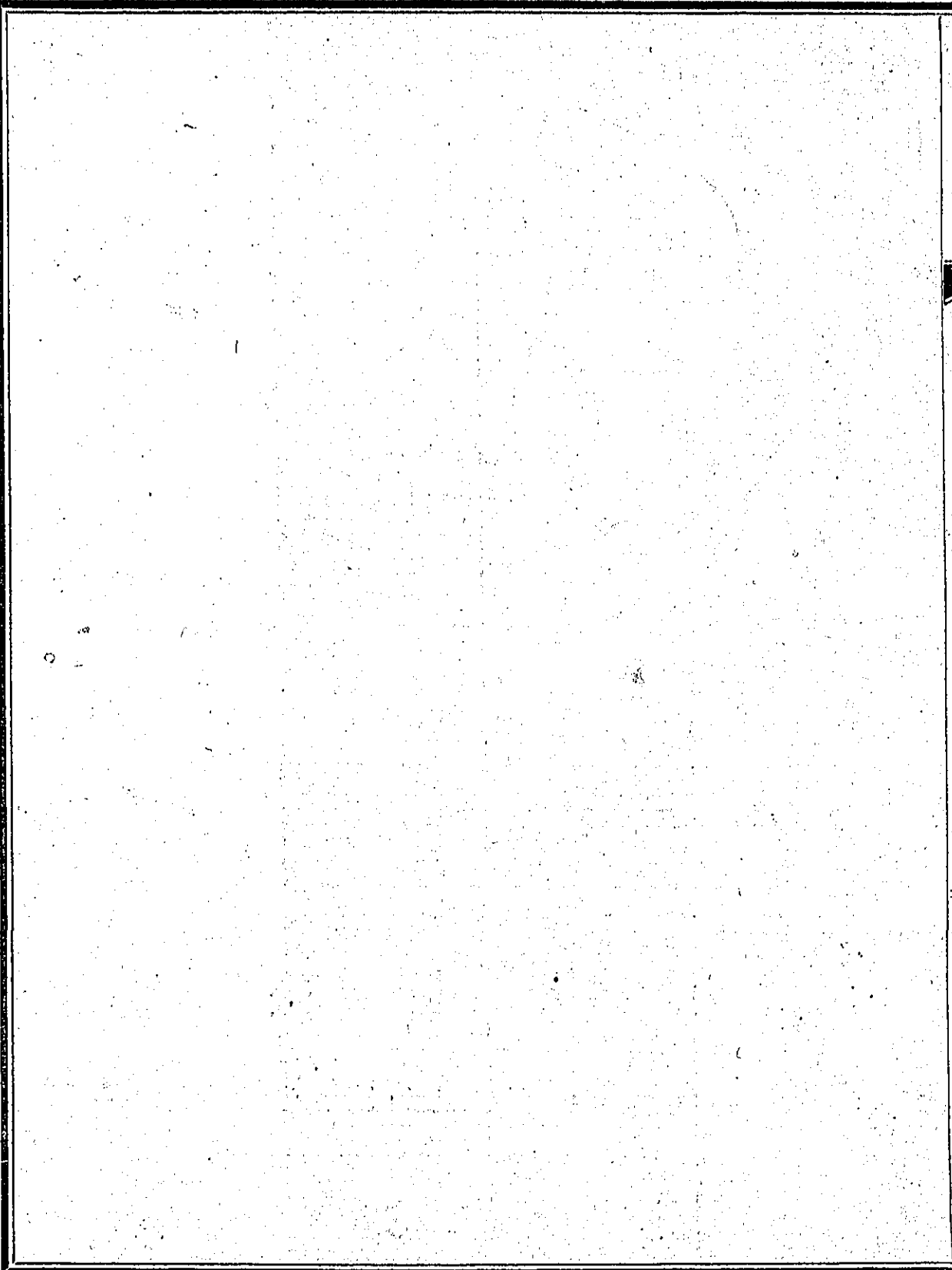
芳安勝爵伯

緒言

此書ハ勝伯ノ編輯ニ係ル抑徳川幕府海軍ノ創始ヨリ拮据
經營其事ニ從フ者ハ伯ナリ而シテ當時ノ事多クハ世ニ明
ナラス今ニシテ之ヲ傳ヘサレハ終ニ湮滅セシヲ恐レ樺山
海軍次官伯ニ勸メ且之ヲ屬ス伯欣然筆ヲ秉リ成ニ及ヒ海
軍省ニ致セリ其記述スル所博引詳覈只幕府海軍ノ濫觴ヲ
悉クスノミナラス當時政略ノ如何モ亦以テ徵スルニ足ル
乃チ當事者ノ參考ニ資セント欲シ今之ヲ印刷シテ頒ツト
云フ

明治二十二年三月

海軍大臣官房



海軍歴史例言

一此書從海軍創業至慶應末年英國海軍教師間ノ事ヲ記ス記傳習中止ノ事間ノ事ヲ記ス記
 事ノ方法ハ年所ヲ逐フテ叙次スト雖氏一事ノ結局ニ關シ
 本末ニ涉ル者アリ而シテ年歴ニ拘リ他事ヲ其後ニ附セス
 シテ其間タニ挿ム氏ハ自他錯襍混淆シテ披閱ニ便ナラサ
 ル故先ツ其事ヲ結了シ次節後段ニ及ンテ却テ前年ノ事ニ
 溯リ追記スルノ類往々前後スルコトアル可シ
 一我政府布令告達ノ類ハ總ヘテ全文ヲ載ス外國書翰ノ如キ
 ハ盡ク譯載スルカ故ニ間々文書冗長ナル者ハ抜抄スルモ
 アレ氏原文ノ意旨ヲ誤ラントヲ畏レ多クハ取舍校訂セス
 譯者起粟ノ儘ニ掲記ス

一編中擡頭缺字等ノ繁節ハ大抵之ヲ省キ原文ニ從フ
 一上一字或ハ二字ヲ缺キテ降記スル者ハ本文ノ出處及ヒ據ル所ノ事跡ヲ證スル爲メノ參照ニ供シ或ハ其事ノ由テ來ル所ノ考案ヲ錄ス
 一船具綱類銃器ノ如キ譯語ニテ解シ難クト認ムル者ハ一切洋名ノ稱ニ仍ル
 一此編内ニ於テ歐米各國人ノ官職姓氏國郡及ヒ器物ノ名稱ヲ原語ノ儘書翰或ハ諸表中ニ音譯シ掲クル等片假名文字ニテ記載セシ分其前後ニ接續セル所ノ同体文字ニ混シ或ハ讀ミ易カラサルコアルヲ以テ官名ハ右傍ニ單線ヲ畫シ人名ハ右傍ニ雙線ヲ畫シ地名ハ左傍ニ單線ヲ畫シ物名ハ左傍ニ雙線ヲ畫ス例之ハカピテインドンクルキユルシユ

ス||アムステルダムスチ|ムボ|ト等ノ如キ類但前四箇ノ符號ニ適應セサルモノハ其一語ノ首尾ニ小勾畫ヲ附ス「マヌーフル」ドツク」ト云フノ類ナリ

一第一卷ノ首ニ大綱總目錄ノミヲ掲載シ項中細條目次ハ爰ニ略シ各冊索引ニ便スル爲メ毎卷首ニ之ヲ擧ク
 一此編纂ニ付引用セル書類之内第六卷長崎製鐵所創設ノ件ハ重モニ永持明德中臺信太郎ノ兩氏ヨリ借受ケシモノヲ交互併記シ第十八卷佛國教師海軍傳習ノ件ハ專ラ長田清藏氏ノ手記ニ據リ及第廿卷ヨリ第廿二卷ニ至ル横須賀製鐵所創設ノ件ハ槩ネ濱口英幹氏ヨリ送附セシモノヲ取捨シ以テ編成ス其他數項ニ採ル處諸氏之所藏ニ係ル抄録私乘并圖表等若干アルモ就中右四氏ノ如キハ最モ多キニ居

ルト云

一編纂ノ材料ハ過ル戊辰ノ歲流離顛沛ノ時ニ際シ雜記牒簿ノ類槩ネ散逸シ徵證スルニ足ルモノ甚々鮮ナク或ハ基立創始ノ記事アルモ終末ノ件ヲ闕キ或ハ纔カニ中間ノミアリテ首尾ヲ存セサル等諸氏ノ私乘今ニ遺ル者ト及ヒ聞見臆記スル所トヲ以テ蒐輯ス因テ脱落謬誤ヲ免カレント保ス可カラス固ヨリ尋常普通ノ書類ト異ニシテ坊間店肆ニ漏出スル者トテハ絶ヘテアルナシ如此資料ノ乏シキニ由リ遽カニ完備ヲ得ンコトハ最モ難シ只主トスル處假令ヒ詳略粗密ノ差アルトモ徒ラニ文飾セス特ニ確實ノ記録タラシコトヲ要ス

明治二十一年十二月

勝安芳誌

海軍歴史總目

海軍歴史卷之一

海軍創立ノ起因

海軍歴史卷之二

下田港魯人遭難スクーザル船新造

海軍歴史卷之三

海軍傳習之上

海軍歴史卷之四

海軍傳習之中

海軍歴史卷之五

海軍傳習之下

海軍歴史卷之六

長崎製鐵所

海軍歴史卷之七

咸臨艦米國渡航之上

海軍歴史卷之八

咸臨艦米國渡航之中

海軍歴史卷之九

咸臨艦米國渡航之下

海軍歴史卷之十

小笠原島開拓之上

海軍歴史卷之十一

小笠原島開拓之中

海軍歴史卷之十二

小笠原島開拓之下

海軍歴史卷之十三

軍制改正之上

海軍歴史卷之十四

軍制改正之中

海軍歴史卷之十五

軍制改正之下

海軍歴史卷之十六

沿海測量

海軍歴史卷之十七

神戸操練所設置

海軍歷史卷之十八

佛國教師海軍傳習

海軍歷史卷之十九

英國教師海軍傳習

海軍歷史卷之二十

橫濱及橫須賀製鐵所創設之上

海軍歷史卷之二十一

橫濱及橫須賀製鐵所創設之中

海軍歷史卷之二十二

橫濱及橫須賀製鐵所創設之下

海軍歷史卷之二十三

船譜

海軍歷史卷之二十四

費額及雜項之上

海軍歷史卷之二十五

費額及雜項之下

海軍歴史卷之一

海軍創立ノ起因

目錄

和蘭人之風說書

評定所一座評議

異國船ノ打拂ヲ止ル布令

和蘭甲比丹へ諭書

和蘭國王ノ忠告

同返翰

文化度長崎ノ變

米利堅國ノ使船渡來

大船製造ノ禁ヲ解ク

日立丸ノ雛形

小野友五郎氏ノ撰述

近海乗試

海軍歴史卷之一

海軍創立ノ起因

宇内ノ大勢ヲ思フニ古昔大ニ開ケ長驅シテ東亞西歐ヲ並吞
 セシモ後世衰滅シテ寥々聞ユルナキニ到ルモノアリ昔時微
 ヤタル邦國大ニ開明ヲ以テ天下ニ誇視スルモノアリ遠ク古
 ヲ考ヘ今ヲ徴スルニ一國ノ論徒ラニ開港鎖國ニ汲ヤスルモ
 ノハ天下ノ公論ト謂フ可カラズ是一邦ノ私論ニシテ豈ニ達
 觀トスヘケンヤ我 邦天保年間ノ幾ント末ニ當リ國家二百
 四十有餘年ノ間昇平無事ニシテ風俗ハ倍々奢侈ニ流レ人心
 ハ彌々遊惰ニ趨リ治世ニ亂ヲ忘レサル等ノ志念アル者少ナ
 シ況ンヤ海外ノ事ニ至リテハ上下茫乎トシテ毫モ万國ニ侮

蔑セラレ若クハ蠶食セラレンコトヲ顧慮スルモノナシ圖ヲサ
リキ同九戌戌年冬俄然荷蘭國風說書ヲ肥前長崎入港ノ全國
船主ヨリシテ達セリ其主意翌年春季ニ英咭利人莫利宋トイ
ヘル者多勢ヲ卒ヒテ相州浦賀港ニ入津スヘクトノ旨云々其
譯文ニ云ク

當秋長崎入津ノ阿蘭陀船主ヨリ申立候イギリス船ノ内ニ
日本人七人漂流仕候ヲイギリス船洋中ニテ救申候由右ヲ
蘭人見受候間日本國ノ義ハ鎖國ノ禁ニ候得者他國ヨリ直
ニ届候事ハ出來不申阿蘭陀人へ受取候テ相届可申旨兼テ
申渡有之候間此方へ渡シ可然由申談候處イギリス人申候
ハ此方ヨリ直ニエフ江府ト云フハ届可申其方ノ世話ニハ
相成不申ト申斷候由左候へハ來春ハ浦賀へ參リ可申哉送

リ參リ候者ハヒチマンホント申者ニテ東洋十六島ノ總督
ノ由人數モ多ク召連可申由

天保九戌年十月

此時幕府要路ニ當ル所ノ執政諸有司寬待ト打拂ノ其可否妄
リニ果斷一定シ難ク内議紛然孰レカ歸スル所ヲ得ス終ニ衆
議ヲ盡クシテ其決ヲ取ランカ爲メ評定所一座ノ議ヲ開クニ
至ル當時其評議ニ係ルノ文書ニ云

當秋阿蘭陀船入津ノ節カピタン共ヨリ書出候風說書ノ
様長崎奉行久世伊勢守伺ニ付

一漂流ノ日本人爲乗組候異國船渡來可致哉ノ風說書阿蘭陀
カピタン差出候ニ付取計方ノ義文化度松前表ヘヲロシヤ
船渡來ノ節被仰渡候御書付之趣意今般評議ノ様ニ付テハ

海軍歴史 卷之十一
不分明ニ有之哉取調可申上旨

右書付寫別ニ書通共二冊五通添越前守田中休藏ヲ以一座へ渡勘定奉行遠山左衛門尉受取

去ル五日評議致し可申上旨被仰聞御渡被成候久世伊勢守相窺候書面一覽仕候處此度入津仕候阿蘭陀カピタン差出候横文字書付和解爲致候處漂流之日本人七人爲乗組候モリソシト申エグレス船漂流人送越候様右ハ内實商買相願候爲江府近海へ至る之風説之由右之通日本人異國に漂流罷在候趣ニ付手寄も有之候ハ、重而入津之節連渡候様當秋阿蘭陀人出帆之砌可申渡哉之段御内意相伺候様ニ御座候此度林大學頭并神尾山城守水野舍人御勘定奉行吟味役等取調申上候書面とも夫々一覽之上勘辨評議仕候處元來

異國に漂流之日本人連渡候義兼而阿蘭陀人にも得心罷在殊ニ今般カピタン申立候風説書之義を以右漂流人連渡候様阿蘭陀人に申渡候ハ、漂民を憐み求候義と彼國之者共推考致間敷共難申左候而者外國に被對候趣意に被觸候筋に付漂流人連渡候義者阿蘭陀人に申渡候に不及旨被仰渡可然且前書之次第を以此後エグレス船江府近海へ渡來之程も難計候得者異國船打拂之義に付而者文政八酉年之御書付にイギリス船先年於長崎及狼藉近年ハ所々に乗寄薪水食料を乞ひ去ル寅年に至候てハ猥に致上陸或ハ廻船之米穀島方之船野牛等奪取候段追々横行之振廻其上邪宗門勸め入候致方と相聞候に付旁難捨置事に候一体イギリスに不限南蠻西洋之儀ハ御制禁邪教之國に候間以來何れ之

浦方に於ても異國船を見受候ハ、其所に有合せ人夫を以
一圓に打拂逃延候ハ、追船等を不及差出其分に差置押而
致上陸候ハ、擲取又ハ打留候ても不苦候本船近付候ハ、
打潰候共是亦時宜次第可取計旨被 仰出候尤唐船朝鮮琉
球などは船形人物も可相分候得共阿蘭船は見分け相成兼
可申右等之船万一打誤候共御察度有之間敷候間無二念打
拂を心懸圖を不失様取計候處專要に有之況交易願望之趣
意を含信義を唱漂民を囿に亂を謀候段猶更不届之仕方
付大學頭申上候様も有之候得共右体蠻夷之奸賊に對し接
待之禮を可設筋にては有之間敷縱令漂民連渡候共山城守
申上候文化度長崎表に渡來致候魯西亞船日本漂流人連渡
候節被仰渡候様等思辨候ても御仁惠被爲施候は平常ふ可

有之義に而
御國之災害を被爲除候爲賤民之存込に不拘御取計可有之
は
御國政之大事一時摧蠻之御所置に付敢て君徳を薄し候道
理は有之間敷候間向後彌右御書付之趣を以無二念打拂候
義勿論に有之尤海岸御備之義は兼く向くに於て心得罷在
候得者今般風説之様別段右之向へ御沙汰には及ひ申間敷
義と奉存候右評議仕候趣書面之通に御座候書付五通返上
仕候以上

評定所

戊十月

一 座

斯ノ如ク上ニハ專ラ舊法打拂ノ説ヲ固持ス然ルニ下ニハ草莽ノ有志者輩慷慨ヲ懷クノ餘寬待主義ヲ以テ潛カニ横議スルト太甚シク是ニ於テ隱然下者ノ議上議ニ反ス終ニ測ラスシテ其嫌疑ヲ生シ忌諱ニ觸ル、ニ到ル當時蘭學者高野長英渡邊登ハ譴責ヲ蒙リテ各々刑ニ處セラレタリ然ト雖而上議モ亦弁テ、忽トスヘカヲサルモノ有リ時ノ有司鳥居溜藏等ヲシテ邊海警衛ノ巡視ヲ爲サ令ム其後漸次ニ海防ノ事務頗ル多端ナルモ槩ネ舊例ニ率由シテ荏苒五六年ノ星霜ヲ經過セシ天保十四年閏九月中閣老水野越前守禰職セララル、ニ當リ之ニ屬スル所ノ鳥居溜藏其它從ツテ事ヲ執ルノ輩亦嚴罰ニ處セララル、者數名繼キテ阿部伊勢守閣老首坐トナリ政務ヲ總理ス此侯近世ノ盛價高シ於賢明ノ閣老此時ニ當テ吏胥ノ轉免黜陟ア

リシヨリ漸ク政体ノ變更ヲ兆サシタリ蓋シ海外万国ノ形勢ヲ審察シ祖先ノ舊法固守爲ス可カラズ早晚變革セスンハアル可ヲサルノ時事情實ヲ熟考シ日ニ月ニ前鎖國ノ論議消絶シテ悉ク開港ノ説ニ赴クト雖也却テ世ノ有志者ハ攘夷ノ説ヲ主張スル者起ルニ至レリ是レ近時々勢ノ一變ナリ是ヨリ前天保十三壬寅年七月異國船ノ打拂ヲ止ム其令ニ曰異國船渡來之節無二念打拂可申旨文政八年被 仰出候然る處當時萬事御改正に付享保寛政度之御政事亦被復不寄何事御仁政を被施度との難有思召に候右に付而者外國之者にても難風に逢漂流等にて食物薪水を乞候迄は渡來候を其事情不相分に一圖に打拂候而者萬國に被對候御處置とも不被 思召候依之文化三年異國船渡來之節取計方之

儀に付被 仰出候趣に相復し候様被 仰出候間異國船と見謂候は、篤と様子相糺し食料薪水等乏敷歸帆難成趣に候は、望之品相應に與へ歸帆可致旨申諭尤上陸は爲致間敷候併此通被 仰出候付而者海岸防禦之手當ゆるかせに致し置宜など心得違又者猥に異國人に親み候義等者致間敷筋に付警衛之義者彌嚴重に致し人數并武器手當等之義者是迄よりは一段手厚聊よても心弛ま無之様相心得可申候若異國船より海岸之様子をうかひ其場所人心之動靜を試候ため杯に鐵砲を打掛候類可有之哉も難計候得共夫等之事に動搖不致渡來之節事實能く相分り御憐恤之御主意貫き候様取計可申候され共彼方より亂妨之始末有之候歟望之品相與へ候ても歸帆不致及異儀候は、速に打拂臨

機之取計者勿論之事に候備向手當之義者猶追而相達候次第も可有之哉に候文化三年相觸候趣書留者可有之候得共爲心得別紙寫相達候

別紙

文化三寅年相觸候趣

先達ておろしや船長崎に致渡來通商等之義相願候得共難取用筋に付其旨申諭先年與置候信牌も取上之以來乘渡間敷旨堅申渡歸帆爲致候に付再渡者致間敷候得共此後万一漂流し事寄乘渡何れ之浦方に船を繫申間敷ものにて無之候間異國船と見受候は、早く致手當人數等差配先見分之者差出得と様子相糺彌おろしや船に相違あく相聞候は

能く申諭成丈穩に歸帆いたし候様可取計候尤實々難風に逢漂流候様子にて食物薪水等乏敷直に歸帆難相成次第候は、相應に其品相與歸帆可爲致候且何程相願候共決而上陸者不爲致歸帆迄者番船附置見物等をも相禁其段早々可有注進候尤再應申諭候ても相拒歸帆不致異儀およひ候は、時宜に應し不及伺打拂其旨可申聞候右体之始末至候節者諸事實政三亥年異國船之儀に付相觸候趣に准し取計可申候右之趣万石以上之面く并其以下にても海邊に領分御預り知行所有之面くは不洩様可被相觸候

正月

天保十三年壬寅七月

かひとんと可申渡旨書付

異國船日本之沖合に渡り來るの時打拂方之儀おこそかに取計ふに付阿蘭陀船も長崎之外に乘よする事有間敷にも無之船之形似寄候得者兼而其旨相心得不慮之過者無之様心懸通船致すへき旨文政八年申渡置候處當時何事によら

御仁惠を被施度との難有 思召に付外國之ものにてても難風に逢漂流等にて食物薪水を乞迄に渡來り候を其事情にかはらと一圖よ弓鐵砲等を打放候而者外國に對し信義を失はれ候御所置に付今より以後者異國人渡り來候共食物薪水等を乞の類は打拂はす乞る旨にまかせ歸帆可爲致

事に取計ふの間よつては阿蘭陀人共心安く通船致せべく候外國之者たり共箇程迄に信義を厚く思召難有儀を能く相わきまへる候

天保十三年壬寅十月六日

大目付に

異國之船渡來之節は二念あく可打拂旨文政八年被仰出候得共何之別心もこれあき船風波の難に逢漂來候類は格別之御仁恵にてみたりに打拂ふましくよつてハ武備之義者彌嚴重ふ可心懸旨此度改而被仰出候事に付諸國之廻船漁船等船の乗筋を相考海上におゐて可成丈異國之船に不出合

様可心懸候乍然無餘義場合にて出會候歟又は異國之船より此かたの船へ近づき品物などあたへ候様成事も有之候は、猶更之義他領たりとも着岸之節其所之役人に有体には、猶置可申候尤御咎等者無之候勿論異國人に親しみ候事は前より御法度に候へは其旨兼て船方漁民等相心得堅く可相守候若親しみ候義をかく置後日相顯るゝにおゐては用捨あく可被處嚴科候有体訴出候は、一旦同意之ものふても御咎は無之時宜により候ては御褒美をも下さるべく候間聊不相包可申出候其旨相心得彌ゆるかせにすへからざるもの也

十月

右之趣文政八年被仰出候浦へ建札と引替建置候様向く

に可被相觸候

弘化元甲辰年七月荷蘭國王軍艦波連番具號ヲ長崎港ニ送致
ス其艦將勾普斯國王書翰ヲ呈ス是レ即チ懇篤ナル忠告ノ報
ニシテ我ニ益スルモノ尠ナカラス是ヨリシテ海軍ノ興サ、
ル可ラサルノ機會漸ク人心腦裏ニ生シ大ニ後年政略ヲ變通
スルノ基本トナレリ

和蘭國王書翰

鍵箱之上書和解

此封印する箱は和蘭國王より日本帝に呈する書翰箱の
鍵を納む江戸城に於て書翰の取扱の命を奉する高貴の

人のみ開封することを得ん

曆數千八百四十四年二月十五日天保十四年二月廿七日に當る瓦

刺汾法瓦和蘭の都に於て記す

和蘭國王の密談所頭取

鍵箱の封印和解

王の密談所

書翰外箱上書の和解

日本國帝殿下征夷大將軍を指し奉るなり

和蘭國王書翰和解

和蘭國王微爾烈謨第二世ヘイデコブチーゴツツコーニン
ク、デル、子ーデルランデン、フリンズハンオラーニーチスサ